ロスタイム

作・鏡味富美子
mirror_pica39@yahoo.co.jp

登場人物

佐藤健三(八二)　健三の妻
佐藤ゆう(七五)　佐藤家長女
山口咲子(五〇)　佐藤家次女
渡辺浩美(四七)　佐藤家三女
佐藤りえ(二九)　若かりし健三
ケン(二九)　浩美の夫の愛人
竜崎涼子(二四)　ゆうの実妹、フランス在住
あい(六三)
使者1
使者2
医師
看護師

一場　病院

ＳＥ　心拍数を示す音。

咲子の声「お父さん、しっかりしてお父さん」

明りが入ると病院の個室。
ベッドに横たわる健三（八二）。
健三の容態を看ている医者と看護師。
その姿を心配そうに見詰める長女の咲子(五〇)、少し離れて次女の浩美（四七）、妻のゆう（七五）は地べたに座り手提げ袋をしっかり抱え一心不乱でお菓子を食べている。

医師「今のうちにお別れを・・・」
咲子「お母さん、お父さんに声かけてあげて」
ゆう「(お菓子を取られないように隠す)」
咲子「お母さん」
ゆう「(取られてなるものか)」
咲子「(健三に)お父さん聞こえる?咲子よ・・・浩美もいるのよ」
健三「・・・」
ゆう「(ひたすら食べる)」
浩美「姉さん、喪服持ってきた?」
咲子「え?」

浩美「持って来て正解だったわ」
医者「(咳払い)」
看護師「佐藤さん、聞いてますからね」
浩美「しまった黒のパンスト忘れた、姉さん余分持ってない?」
医者「(強めの咳払い)」

健三が、苦しそうなうめき声を上げる。

咲子「お父さん!?お父さん?」
健三「・・・」
咲子「ねぇりえはまだ?」
浩美「留守番電話には入れておいたけど、いったい何処ほっつき歩いてんだか・・・パリのあいおばちゃんの方が先に着いちゃうかもよ」
咲子「おばちゃんいつ着くって?」
浩美「昨日の電話したら、すぐに向うって言ってたから」
咲子「フランスから日本って一三、四時間よね」

心拍数を示す音が変化する。
慌ただしくなる医師と看護師。
健三に駆け寄る咲子と浩美。
心肺停止音。

咲子・浩美「お父さん?!」
ゆう「(一瞥して、再び食べ始める)」
咲子「お父さん、お父さん、しっかりしてお父さん!」

医師が聴診器で心音を確認する。
つづいて瞳にライトを当てる。
おもむろに時計を見る医師。

咲子・浩美「?!」
医師「八時六分、ご臨終です」
咲子「(嗚咽)」
浩美「(泣く)父さん」

健三を一瞥するが再びお菓子をほおばるゆう。

咲子「お母さん、お父さん死んじゃったよ」
ゆう「(お菓子を食べる)」

浩美「無理よ、父さんの名前すらわからないんだから」
咲子「…」
浩美「あっけないもんよね」

医師達と入れ替わりに、三女のりえ（二九）が病室に走りこんでくる。
手には干し柿の包みを持っている。

りえ「(呆然)」
咲子「りえ」

状況を察知するりえ。

浩美「あんた今まで…」
りえ「あーあ急に呼び出されて、参ったわ」
浩美「なによそれ」

健三の手を握る咲子。

咲子「お父さんの手、まだ温かいから握ってあげて」
浩美「優しい言葉のひとつでも掛けたらどうよ、最後ぐらい」
りえ「やめてよ白々しい、八二年も生きて大往生よ」
咲子「そういう問題じゃないでしょ」
りえ「長引かずに済んでよかったじゃない、ポックリ逝ってくれて助かったって思ってるんでしょ姉さんたちだって」
咲子「！」

いきなり咲子がりえに平手をお見舞いする。

理恵「痛っ、何するのよ」
咲子「謝んなさい、お父さんに」
りえ「ふん」
咲子「さあ早く、ここに手付いて」
理恵「死んだ人に謝ってなんになるのよ」
咲子「今あんたがあるのはお父さんのお陰なのよ」
理恵「くさいテレビドラマみたい」
咲子「情けない」
りえ「…」
浩美「たしかにりえもりえだけど姉さんも…ここぞとばかりいい娘を演じちゃってさ」
咲子「なんでそんなひねくれた物言いするの？」

浩美「私は、昔からひねくれてました」
りえ「それ、いえてる」
浩美「(ヒステリックに) あんたになんかに言われたくないわよ」
りえ「ああいやだ、オバサンのヒステリーは・・・更年期なんじゃない」
浩美「なんですって?こっちだってね、こんな年の離れた妹がいて恥ずかしいったらありゃしない」
りえ「それは私の責任じゃないでしょ!!」
咲子「もう止めましょう、お父さんの前で」

黙る浩美とりえ。
お菓子が空になりあちこちを探し回るゆうがりえの干し柿の包みを見つける。

ゆう「あけて、あけて、干し柿」
一同「(一瞥)」
りえ「わざわざ来て損しちゃった」
ゆう「ねーね、あけてよ」

なんとか干し柿を空けようとするが歯が立たないゆう。

ゆう「(包みを放り投げる)」

が、すぐに思い直して自分の手提げ袋に干し柿をしまいこむゆう。

ゆう「お菓子、お菓子」
咲子「お母さんこんな時ぐらい我慢してよ」
ゆう「イヤイヤお菓子、お菓子」
浩美「その手提げに入ってないの?」

手提げ袋を開いて見ようとする浩美、かたくなに守って見せようとしないゆう。
手提げ袋をめぐってもみ合う二人。

ゆう「ドロボー、ドロボー」
浩美「いくら母さんでも言っていい事と悪い事が・・・」
りえ「ガムならあるよ」

ゆうに一枚渡すりえ。
嬉しそうに包み紙をむいて口にするゆう。

ゆう「(飲み込む)」

再びガムをねだるゆうにもう一枚渡すりえ。

ゆう「(飲み込む)」

もう一枚ガムをねだるゆう。

咲子「お母さん、ガムは飲み込んじゃいけないんだって、りえもちゃんとみてなきゃ！」
ゆう「(口にしようとしたガムを見つめる)」
浩美「葬儀どうする？一番安いのでいいよね？」
咲子「？」
浩美「祭壇、簡単なのでいいでしょ？」
咲子「あまりみすぼらしいお葬式じゃお父さんかわいそう、出来る限り立派にしてもらいましょうよ」

ガムを口に入れようか迷っているゆう。

浩美「どうせもう死んじゃったんだもん、お金かけても仕方ないわよ。大体、葬式を立派にしてやりたいなんて残った人間の見栄以外なんでもないのよ」
咲子「だけど」
浩美「だったら姉さん全部支払ってくれる？」
咲子「それは・・・」
浩美「ほぉら」
ゆう「(ガムに向かって) ああ、寂しいよね」

ゆうの言葉に驚く姉妹。

ゆう「(見つめていたガムを口にいれ) 口が」
一同「(ため息)」

次をねだってくるゆうに全部のガムを渡すりえ。

ゆう「(嬉しそう)」
浩美「さし当たってお金がいるわよね、入院費も払わなくちゃいけないし」
咲子「そうね」
浩美「(手を出して)悪いわね持ち合わせないの」
咲子「私だってそんな持ち合わせは・・」
浩美「ウソウソ (独り言) 金持ちほどケチってよく言ったものよね」

財布から現金を出し浩美に渡す咲子。

浩美「それにウチは子供にもお金かかるし」

咲子「…」

りえから渡されたガムを次から次へと口に放り込むゆう。

片隅に黄泉(よみ)の使者1が浮かび上がる。

ファイルを脇に抱え折り目正しい感じの使者1。

誰一人使者には気づいていない。

使者1「早く、急いで！」

続いて浮かび上がる使者2。

使者1と同じ格好をしているにも拘らずなんとなくだらりとした感じの使者2。

使者1「何してるんですか」

使者2「すみません、なんだか服のサイズが」

腕時計を見る使者1。

使者1「3分遅れました」

使者2「だって服が」

使者1「私たちの仕事は、時間に正確でなくてはならないのです」

使者2「はあ」

服が気になって仕方ない使者2。

使者1がファイルに何かメモする。

使者1「遅刻×と」

使者2「え？」

使者1「いいですか、あなたの研修期間は今回が最後なんです。次からはあなた一人なんですよ」

使者2「はあ、マジやばいですよね」

使者1「(ファイルにメモ) 言葉づかい×」

再び服が気になる使者2。

使者1「(ファイルにメモ) 身支度×」

使者2「そんなぁだってサイズが…」

使者１「口答え×」
使者２「それは、悪い事ばかり書くんですか？」
使者１「あなたの場合、そうなりますかね」
使者２「（しょんぼり）」

起き上がる健三。混乱した様子で左耳にふれる。※左耳に触れるのは健三の癖。
姉妹は誰一人気づ相変わらず小競り合いをしながら病室の片付けなどをしている。

健三「あああ、なげかわしい！」

姉妹げんかを見てなげく健三。

使者１「後悔先にたたず」
使者２「育て方をを間違えましたね」
健三「お宅たち誰？」

ファイルを読み上げる使者１。
横に並ぶが服が気になって仕方のない使者２。

使者１「佐藤健三さん八二歳。本日×月××日×曜日、午前八時六分ご臨終」
健三「ご臨終？！」
使者１「はい、長い間ご苦労様でした」
健三「ワシが死んだ…」
使者２「この度はとんだことで」
使者１「私たちは黄泉の国からの使者で」
健三「黄泉？」
使者２「まあ簡単に言えば、あの世の事です」
健三「あの世？」
使者１「時間がありませんので手短に説明します」
健三「あのぉ(左耳を触る)」
使者１「（人差し指を立てて）しっ、質問は最後にまとめてお願いします」
健三「はあ」
使者１「只今よりあなた様のご葬儀まで、生きている間にやり残した事や整理したいことなどをしていただく時間が与えられます」
健三「あのぉー」
使者１・２「（人差し指を立てて）しっ」
使者２「まあ簡単に言えば、サッカーのロスタイムみないなものです」
健三「ロスタイム」
使者１「運がいいと五〇時間から六〇時間あるのですが…あなたの場合三〇時間前後っ

て所でしょうか」
使者2「まあ簡単に言えば、お気の毒様ってことで」
健三「そんな」
使者1「明後日が友引なので、今夜がお通夜、明日が告別式になるでしょうから…やはり三〇時間前後でしょう」
健三「三〇時間」
使者1「もっとも告別式が午前か午後によって若干時間は変わってきますが」
健三「…」
使者1「では質問どうぞ」
健三「(考えて)ワシは本当の本当に死んだんですか?」
使者1「はい」
健三「全ての人にロスタイムはあるんですか?」
使者1「はい」
健三「(混乱して左耳を触る)でもそんな話聞いたことないんですが」
使者1「まあ皆さん死んでからのことですからお聞きになるのは無理かと」
健三「なるほど」
使者1「で、体の方はどうしましょう?」
健三「体?」
使者1「その体で現世に戻ったら心霊現象になってしまいますので、こちらで別の体を用意いたします」
健三「別の体?」
使者1「中には歴史上の人物や外国スターになりたいなんて方もいらっしゃいますが、有名人はお断りしております」
健三「(左耳にふれ考え込む)」
使者1「(時計を見る)」
健三「…」

健三の無言の間にイライラする使者1。

使者1「じゃあ相田章さんにしておきましょう」
健三「相田章さん?」
使者2「体リスト一番の方です」
健三「体リスト一番って、そんな全然知らない人の体なんて嫌ですよ」
使者1「でしたら若いころのご自分に戻られる方も多いですけど」
健三「もう一度、戻れるんですか若い頃に?」
使者1「はい、三〇時間前後ですが」
健三「じゃあ、二九歳の体にしてください」
使者1「かしこまりました」
健三「どうしてだと思います?」

使者1「(ファイルにメモしながら) さあ」
健三「知りたくありません?」
使者1「(時計を見る) 別に」
使者2「知りたいです」
健三「妻と結婚した年なんですよ」
使者2「そうなんですか」
健三「あのころが一番いいときだった…何もかもが新鮮で、一緒にいるだけで嬉しくて、子供が生まれ…可愛かったなぁ」

思い出に浸る健三。

使者2「それが今じゃあねぇ」
健三「自分ひとりで大きくなったような顔をして、お恥ずかしい限りです」
使者2「心中お察しします、自分の死に際で言い争われちゃぁね」
健三「こんな娘たちを残して死ななきゃ成らないなんて(ため息)」
使者1「(腕時計を見ながら) ですからそれはロスタイムで」
健三「それに妻だって」
使者2「かなり進んでますよね奥様」
健三「心配なんですよ、これから先どうなっちゃうのか」
使者1「ですからそれはロスタイムで」
健三「一体どうしたらいいんでしょう」
使者2「こうしたらどうでしょう」
健三「何かいいアイディアでも?」
使者2「あのですねぇ…」

時間が気になって仕方ない使者1。

使者1「(ファイルにメモ)時間配分×」
使者2「ええー」
健三「なんですかアレ?」
使者2「私の通信簿みたいなものです」
健三「通信簿?」
使者1「余計なこと話してないで二九歳のマニュアル出して」

バッグのマニュアルを探すが、なかなか見つけられない使者2。

健三「そうだ大事に取って置いたお酒、飲んどかなくちゃ」
使者1「(ファイルに記入している)」
健三「それから通帳の隠し場所教えておかないとな、あとは…」

使者１「大事な事言い忘れました、正体がバレた時点でロスタイムは打ち切りですから」
健三「えっ、そうなんですか？」
使者１「はい、あなたはもうこの世には存在しない人間ですから」
健三「・・・」
使者１「（使者２に）まだですかマニュアル」
使者２「（あせって）ただいま」

何枚かのマニュアルを取り出しどれを渡せばいいかわからない様子で適当にマニュアルを、選んで使者１に渡す。

使者１「（マニュアルを受け取り）それとこれは二九歳の若者らしい振る舞いができるマニュアルです、よく読んでおいてください」
健三「はい」
使者１「決して本名を名乗ったり、正体がバレる様な言動は慎んでください」
健三「はい」

時計を気にする使者１。

使者１「それでは次に行かなければなりませんので」
健三「次？」
使者２「この時期結構多いんですよ・・・季節の変わり目って、よく言うでしょ」
健三「なるほど」
使者１「くれぐれもバレる事のないように」
健三「はい」
使者２「頑張ってくださいね」
健三「はい」

勢いよく倒れ死んだ時の体勢に戻る健三。

りえ「あっ！？」
咲子・浩美「？」
りえ「今父さんが動いた」
浩美「（驚いて）えっ？！」
咲子「まさか」
りえ「本当に動いたんだってば」

健三を確認し首を横に振る咲子。

浩美「もう遅れてきて人騒がせなんだから」

りえ「本当なんだってば」
咲子「さっ片付けましょう」

片付けを始める咲子、それを手伝う浩美とりえ。

使者１「(安堵のため息)危なかった･･･」
使者２「そうですか?多少のアクシデントあったほうが楽しいじゃないですか」
使者１「･･･」
使者２「今回のロスタイム、嵐が来ますよきっと」
使者１「不適切発言･･･×」
使者２「ええー」

消える使者1、その後を追いかけるように使者2も消える。
病室の片付けをしている姉妹。

咲子「純一さん車だったわよね?」
浩美「･･･」
咲子「あら純一さんは?」
浩美「帰った」
咲子「え?いつの間に?」
浩美「あの人が居たってあてになりゃしないわよ」
咲子「でも」
浩美「葬儀屋に電話してくる」

再びりえにお菓子を催促するゆう。
いつの間にか若返っている健三（ケン）が、部屋の片隅に現れる。
もの珍しそうに自分の姿を見るケン。

浩美「誰?」
ケン「!」
咲子「どちらさまです?」
ケン「･･･」
一同「･･･」

お互いに見詰めあうケンと姉妹。

浩美「(咲子に) 部屋間違えたのかな」
咲子「何かご用ですか?」
ケン「(左耳を触りながら) いや、あのぉ、そのぉ」

咲子「父のお知り合いの方?」
ケン「ええ、知り合いといえば知り合いというか」

ケンを見つけるゆう。

ゆう「お父さん!」
咲子「何言ってるの、お母さん」
ゆう「お父さん、早くうちに帰りましょう」
咲子「(ケンに)すみません、母ちょっと…」
健三「大丈夫慣れていますから」
咲子「慣れてる?」
ゆう「さっ、早く早く」
ケン「(左耳を触りながら) ああそうだね」
咲子「お母さん、困ってらっしゃるじゃない」
浩美「一体誰よあんた?知り合いってどういう?」
ゆう「急いでご飯の支度しますから、さあお父さん」

ケンを無理やり連れ出すゆう。
呆気に取られる姉妹。

浩美「誰だろ」
りえ「お母さん妙になついてたよね」
浩美「私たちにはろくに口も聞かないくせに…父さんも哀れねぇ、よその若い男と間違われちゃって」
咲子「デイサービスのボランティアの人じゃない?お父さんとも顔見知り、お母さんの病気だって慣れてますって言ってたわよ」
りえ「ああデイサービスのね」
浩美「いや、遺産目当にボケた母さんに近づいてきた輩かも」
咲子「まさか」
浩美「いるのよそういうの、年より騙して甘い汁吸ってる連中」
咲子「そんな人には見えなかったけど」
浩美「世間知らずなのよ姉さんは」
りえ「なんでもいいけど、あたし帰るわ」
浩美「帰るってどういうことよ」
りえ「葬儀屋さんが全部やってくれるんでしょ、私やることないから」
咲子「何言ってるの、座布団出したりお客さんのお茶の用意をしたり…しなきゃいけないことたくさんあるのよ」
浩美「そうよ手伝いなさい」
りえ「めんどくさい」

浩美「(ハッとして)こんなことしてる場合じゃない…あの男家に行ったんでしょ?危険危険、気になるから先に家に戻るわ」

病室を後にする、浩美。

咲子「ちょっと葬儀屋さんは」

咲子の携帯が鳴る。

咲子「はい…お義母さま…先ほど父が息を引き取りました…ハイ…澄夫さんは?…急な出張…は?…浅野さんのお嫁さんがオメデタ?…あの、今ここでそんな話…」

咲子が、病室を出て行く。
ふてくされて荷物を片付けるりえ。
暗転。

二場　佐藤家

ゆうの部屋と居間がある。
それぞれの部屋は縁側でつながっており、玄関、台所にも続いている。
居間には祭壇が作られている。

○ゆうの部屋。
お茶を飲んでいるケンとゆう。
ゆうのそばには、いつもの手提げ袋がきちんと置いてある。
姉妹は通夜の準備の為居間をウロウロしているが、忙しいのは咲子だけ。

ケン「やっぱり家はいいなぁ」

手提げ袋から干し柿を出すゆう。

ゆう「はい、お父さんの好物」
ケン「おっ!旭屋の干し柿だ、干し柿は旭屋が一番」

○居間
ゆうの部屋が気になって仕方のない浩美。
意味もなくうろうろするりえ。

咲子「お客さん用の座布団出して、ほら浩美ったら」

浩美「(様子を伺っている)」
りえ「これ、どこに置けばいいの？」
咲子「それ位自分で考えなさいよ」

面倒臭くなり座り込んで荷物の中にあった雑誌なんかを読み始めるりえ。

咲子「ちょっとあんた達、何やってるの？」

仕方なく、せっせと一人働く咲子。

○ゆうの部屋
ケン「りえも干し柿には目がなかったよな」
ゆう「ええ、いつだったか美味しい美味しいって三十個も食べて」
ケン「お腹こわして遠足行けなかったんだよな…懐かしいなぁ」
ゆう「そうですね」
ケン「ゆうと又こんな話ができるなんてね」
ゆう「…」
ケン「病気、治ってよかった」
ゆう「病気…お父さんどこか悪いんですか？」
ケン「ワシじゃない、あんただよ」
ゆう「私？」
ケン「(ため息)」

ゆうの部屋にやってくる咲子。

ゆう「いらっしゃいませ、どちらさんでしたかね？」
咲子「あなたの長女、咲子です」
ゆう「咲子…」

座布団を押し入れから取り出し居間にもどる咲子。

○居間
咲子「りえ、雑誌なんか読んでないで片付けなさい！」
りえ「はいはい」
浩美「どうだったあの男？」
咲子「どうって、お母さんと仲良くおしゃべりしてたわよ」
浩美「怪しい」

再びせわしく働く咲子、隣が気になって仕方ない浩美。

ゆうの部屋に荷物を運ぶりえ。

○ゆうの部屋
ケン「おお、りえ」
りえ「なんで呼び捨てよ？」
ケン「(しまった)」
ゆう「父さんに向かって何て口のきき方」
ケン「これはすみません・・・りえさん干し柿どうです？」
りえ「(耳をふさいで) やめて」
ケン「？」
りえ「その単語口にしないで」
ケン「？」
りえ「聞いただけでアレルギーが出るのよ」
ケン「干し柿のこと？」
りえ「(耳をふさいで)だから止めてって…嫌な思い出があるの子供の頃」
ケン「(苦笑)」

怪訝そうに、ケンを見るりえ。

ゆう「(突然)お帰り、手洗いうがいした？」
りえ「？」
ゆう「あら、ランドセルはどうしたの？」
りえ「(ため息)」
ゆう「宿題と明日の時間割すぐにやらなきゃだめよ」
りえ「はい、はい」
ゆう「返事は一回」
りえ「はーい」

○居間
相変わらず、ゆうの部屋を気にして働かない浩美。
居間に戻ってくるりえ。

咲子「(浩美に)もういい加減にしなさいよ」
浩美「ねぇお母さんのあの手提げ袋、やけに大事にしるとおもわない？」
咲子「そうね」
浩美「通帳とか、権利書とか持ち歩いてるんじゃないでしょうね」
咲子「まさか」
浩美「うちの財産どれくらいあるのかなあ」
りえ「お金のことばっかり」

浩美「独身気ままなあんたに何が分かるのよ…この際だから言わせてもらうけど遺産相続、きっちり分配してもらうから」
咲子「まだお葬式も済んでないのに…お母さんだって元気なのよ」
浩美「そんな事言って姉さん独り占めする気じゃないでしょうね」
咲子「どうして私が」
浩美「ああそう、お金持ちの姉さんに関係ないか…だったら遺産放棄してよ」
咲子「お金持ってねウチだって大変なの、でも遺産なんてあてにしたらダメ」
浩美「姉さんはあてにしてなくても、義兄さんがなんて言うか…」
咲子「浩美」
りえ「姉さんの旦那こそ、狙ってんじゃないの？」
浩美「ウチは大丈夫よ」
りえ「(苦笑)凄い自信」
浩美「だって、別れるつもりだから」
咲子・りえ「？！」
咲子「別れるって…」
浩美「遺産さえ手に入ったら、即別れてやる」
りえ「なんで？」
浩美「借金あちこちにつくって」
咲子「それ本当？」
浩美「パチンコ、競馬、麻雀…ギャンブルのセンスなんてない癖に」
咲子「それで離婚？」
浩美「それだけじゃない…とにかくもう我慢出来ないの」
りえ「女だ？」
浩美「…」
咲子「まさか純一さんに限って」
浩美「…」
咲子「思い過ごしよ」
浩美「車の窓ガラスにJ&R❤って、落書きしてあったの」
咲子「J&R❤」
浩美「Jは、純一のJで…」
りえ「りか、りの、るりこ、れいこ、りょうこ」
浩美「もうじき白黒つくから…興信所で調べてもらってるの」
咲子「子供はどうするの？」
浩美「私が、引き取る」
咲子「引き取るって簡単に言うけど、これからどうやって暮らすの？子供たちも成長するし」
浩美「だからいるのよ遺産が」
咲子「子供がかわいそうだわ、親の都合で」
浩美「…」
咲子「なんの罪もないのよ、子供たちは」

浩美「子供なんて生むんじゃなかった」
咲子「！」
浩美「お金ばっかりかかって、苦労して育ててもなんの感謝もなし」
咲子「…」
浩美「姉さんはいいわね、そんな心配がなくって」
咲子「！」
りえ「（浩美を戒める）姉さん」
浩美「子供の産めない人が羨ましいわ」
咲子「（怒りに、体を震わす）」

ケンが、お湯を取りにポットを抱え廊下で、姉妹の話を立ち聞きしてしまう。

ケン「…」

興奮を一生懸命に抑える咲子。

咲子「いくらお金があってもね、子供は買えないのよ」
浩美「…」
咲子「好きで子供生まないんじゃないから…普通に子供生んだ人に私の気持ちなんてわかりっこない。事あるごとに『赤ちゃんはまだ？』『早く孫を抱きたいわ』なんていわれて」
りえ「姉さん」
咲子「子供がいないと一人前の女として認められないの？」
りえ「そんなことないよ」
咲子「思ってるんでしょう！皆、皆、そういう目であたしを見てる…愛する人の子供を産めない辛さ、あんたにわかる？」

咲子のあまりの勢いに、驚く浩美とりえ。

咲子「純一さんも可哀想」
浩美「え？」
咲子「そうやって相手の気持ちも考えず、ズケズケ物を言うから旦那も嫌気がさすってこと」
浩美「なんですって？」
咲子「浮気されたって仕方がないわ」
浩美「関係ないでしょそんなこと」
ケン「（左耳を触る）純一君が、浮気」

お互いつつかれたくない話題のようで、そっぽを向く咲子と浩美。
重苦しい、雰囲気の一同。

りえ「私お金いらないから、後の事は任せた」
咲子「後の事って」
りえ「この家やお母さんの面倒」
浩美「今まで散々好き勝手しておいて一人だけ逃れようたって許さないわよ」
りえ「だから遺産の権利放棄するから」
浩美「子供の義務はみんな平等なの」

姉妹が再びもめはじめるので、思い切って居間に入ってくるケン。

ケン「お湯を頂きたいんですが」

ケンを一瞥して再びバトルする姉妹。

りえ「姉さんだって今までお母さんの面倒見てなかったくせに」
浩美「・・・」
咲子「私は時々覗きに来てたわ、お料理だって持って来たし」
浩美「あーあまた優等生ぶっちゃって」
ケン「あのぉお湯を・・・」
浩美「大体、姉さん長女のクセして養子も取らずさっさとお嫁に行っちゃってさ」
咲子「・・・」
りえ「じゃ長女の姉さんがお母さんの面倒見ればいいじゃない」
浩美「て事は、この家も土地も全部姉さんのものって事？」
りえ「お母さんの面倒を見るって事はそういうことでしょ」
浩美「私の相続分は？」
りえ「欲しかったら、姉さんがここに住めばいいじゃない」
浩美「私に介護なんて無理よ」
ケン「いい加減にしなさい、自分たちの母親だろ」
三人「！」
ケン「よくもそんな酷いことを」
浩美「他人が口出さないでよ」
ケン「他人じゃない！」
姉妹「他人です！」
ケン「(気づき)他人でした・・・」

いつの間にか、縁側のところに涼子(二四)がきている。
声をかけるが、気づかない一同。

涼子「ごめんください」

一同「?」
涼子「お取り込み中すみません。玄関で声をかけたんですけど…」
咲子「気づきませんで、申し訳ございません」

祭壇を見る涼子。

涼子「この度は…」
咲子「わざわざご丁寧にありがとうございます」

涼子に興味津々の姉妹。

咲子「さあ、どうぞ」

渋々健三に手を合わせる涼子。
決心をして姉妹の前に向く涼子。

涼子「あのぉ…実は私」
咲子「はい」
涼子「…」

はっきりしない涼子にしびれを切らす姉妹。

咲子「失礼ですが、どちら様でしょう?」
涼子「…」
浩美「父のお知り合いの方?」
涼子「…」

姉たちを離れた所に引っ張っていくりえ。

りえ「怪しいよあの女」
浩美「あんたもそう思う?」
りえ「やっぱり姉さんも?」
浩美「もしかしたら、もしかしてよ」
りえ「私もそう思う」
咲子「もしかしたらって?」
りえ「決まってるじゃない」
浩美「父さんったらいつの間に」
咲子「ねぇどういうこと?」
りえ「愛人よ、お父さんの」

ケン「ええっワシ？！違う違う」
咲子「愛人！？あんな若い子」
浩美「隠し子かも！大変、隠し子には遺産相続の権利があるのよ」
ケン「違う違うんだ！」
浩美「うるさいわね、ちょっと黙ってよ」
咲子「隠し子ってことは、私たち４人姉妹だったの？」
ケン「絶対違うって」
りえ「あっち行っててよ」
ケン「あぁ、なんかの間違いだ」

困って耳を触る健三。
浩美に封筒を渡す涼子。

涼子「これ、お返しします」
浩美「なによ？」

封筒の中を見る、浩美。

浩美「お金」
涼子「確かにお返ししましたから」
浩美「どういうこと？」
涼子『何も言わないで受け取ってくれ』って言われても」
りえ「お父さんが手切れ金！」
ケン「（違う違うと首を振る）」
浩美「（金を数えて）五万」
ケン「いくらなんでも少ないだろ」
咲子「信じられない、お父さんが浮気だなんて」
ケン「だからワシじゃない」
涼子「（浩美に）奥さんと話がしたいんですけど」
りえ「無駄だと思うよ」
涼子「？」
咲子「ちょっとボケてて」
涼子「ええ！？（浩美を見ながら）」
ケン「！」

もめている姉妹をよそに、涼子を廊下へ連れ出すケン。
騒ぎを聞きつけゆうも廊下へ出て来る。
ケンと涼子の会話を盗み聞きするゆう。

ケン「君?もしかしたら純一君の?」
涼子「はい、愛人です」
ゆう「愛人!」

一同びっくり。

ゆう「あいじん、あいじん（繰り返し言い、騒ぎ出す）」
咲子「お母さん」
浩美「やっぱり愛人なのね!」
りえ「もうお父さんったらいい年して、気持ち悪い」
ケン「違う違う、違うんだ!」
咲子「不潔よお父さん」
ケン「ワシじゃないんだ」
浩美「サイテー、あのエロ親父」
咲子「酷いわお父さん」
ケン「違う、違うったら…この人は純一君の」

凍りつく一同。

一同「!?」
浩美「純一の?」
ゆう「純一、純一、純一の愛人、純一の愛人」
咲子「お母さん静かにして」
浩美「やめてよ母さん」
りえ「お母さん黙っていよう」
ゆう「純一って私の息子でしたかね?」
りえ「浩美姉さんの旦那さんでしょ」
ゆう「浩美?…浩美!浩美の愛人!浩美、浩美の愛人、純一の愛人、愛人、愛人」

はしゃぎまわるゆう。

浩美「もうやめて…やめてったら…お願いやめて」

相変わらずはしゃぎまくるゆう。
我慢の限界の浩美。

浩美「黙れ!このボケ老人!」
一同「!?」
ゆう「（しんみり）ボケ老人」

ヘナヘナと座り込んで何かを考え込むゆう。

ケン「ゆうさん…」
ゆう「ボケ」
一同「(ゆうを見詰める)」
浩美「母さん、ごめんなさ(い)」

再び立ち上がるゆうを心配そうに見詰める一同。
あかるく盆踊りの振りなんかついてしまうゆう。

ゆう「(明るく楽し気に) ボケ、ボケ、ボケ、純一のボケ、愛人のボケ、浩美のボケ…」
咲子・りえ「お母さん、お母さんってば」
ケン「ゆうさん、ちょっと黙っていてくれ」
ゆう「はい、お父さん」

座って、手提げの中からお菓子を出して食べ始めるゆう。

浩美「名をなのりなさいよ」
涼子「竜崎、涼子です」
りえ「ビンゴ。苗字も名前もR」
浩美「一体なにしに来たの?」
涼子「純一さんと私、愛し合っているんです」
りえ「よくもまあ抜け抜けと…」
浩美「…」
涼子「奥さんと別れて私と一緒になるって」
浩美「…」
涼子「純一さんと早く別れて」
浩美「このぉー」

いきなり涼子につかみかかる浩美、応戦する涼子。
それを止めるケン。
ぶっ散らかった、お菓子を必死で掻き集めるゆう。

浩美「(豹変) この泥棒猫!!」
涼子「(挑戦的な笑い)」
浩美「クッ!!」

再び涼子につかみかかる浩美を、抑えるケン。

お菓子を死守するゆう。

りえ「姉さん落ち着いて」
咲子「そうよ話し合わなきゃ」

深い深呼吸で、自分を落ち着けようとする浩美。

浩美「人の旦那に手出しといてどういう神経？」
涼子「ゴミ屑同然でも、人が拾おうとすると惜しくなる」
咲子「まあ純一さんをゴミだなんて」
りえ「しっ」
浩美「あんたには理性ってもんがないの？モノラルの問題よ、モノラル、わかる？」
りえ「姉さん違う」
涼子「なによモノラルって」
咲子「テレビの音質のね…」
りえ「姉さん、黙ってて」
浩美「人のものを盗んじゃいけないって、子供の頃に親に習わなかった？」
涼子「最後に取ったもん勝ちよ…大リーグのホームランボールだってそうじゃない」
咲子「今度はボールですって純一さん」
りえ「(ため息)」
浩美「全く、どういう育ちしてきたか」
涼子「そっちこそ、どういう躾されてきたのか」
ゆう「(きっぱり) 失礼な！！どこに出しても、恥ずかしくない躾をしてきました」

まともなゆうに驚く一同。
が、再びにらみ合う浩美と涼子。
またお菓子を食べ始めるゆう。

咲子「手切れ金を返しに来たってことは、別れないってこと？」
りえ「いくらなんでも五万じゃね」
涼子「そんなこと言わないで！あの人にとっては精いっぱいの気持ちだから」
浩美「身から出たサビよ、あっちこっちで借金作って…」
涼子「(憐れんで)可哀そうな人…純一さんじゃなくてあなたが」
浩美「(？)言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ」
涼子「純一さん仕事で大きなミスしたのご存知？」
浩美「…」
涼子「彼一人の責任じゃないのに借金までして穴埋めしようとしてるの知ってます？」
浩美「穴埋めで借金」
涼子「何も知らないんですね、それで夫婦と言えるかしら」

浩美「…」
涼子「彼の様子見て、何も感じなかったんですか？」
浩美「…」
ケン「家族に心配かけたくないから言わなかったんだよ」
咲子「そうよ、それがあなたに対する純一さんの愛情よ」
浩美「…」
涼子「愛情、あなたは純一さんの事愛しているんですか？」
浩美「…」
涼子「彼が冷たくて悪い人だったらよかったのに…」
浩美「？」
涼子「(忌々しく)なんであなたなんかに愛情があるのよ」
浩美「！」
涼子「こんなに好きなのに、こんなに憎い…どうして好きになっちゃったんだろう」
ケン「君、純一君の事を本気で…」
涼子「彼の家庭を壊すつもりなんてなかった…会えるだけで嬉しかった」
浩美「だったら最後まで隠れて愛人してりゃ目つぶってあげたのに」
涼子「よかった、あなたより私の愛が本当で」
浩美「勝手な言い分、人の家庭メチャメチャにしといて」
涼子「ええだからお返しします、純一さん」
浩美「いらないわよ今更、あんたにあげるわ純一」
涼子「なによその言い方」
浩美「あんたなんかね、私のお下がりで十分よ」
涼子「お下がり？」
ケン「そんな、物じゃないんだから」
浩美「私いつも姉さんのお下がりばっかりで、一度でいいから人に施してみたかったのよ」
咲子「浩美」
浩美「とっとと持ってきなさいよ、お下がり…もう使い古しのよれよれだけど」

勝ち誇る浩美、反撃の言葉を考える涼子。

涼子「何か勘違いしてません？」
浩美「は？」
涼子「お下がりって言うけど、最後に使ったのは私なんだから」
浩美「(歯ぎしり)」
涼子「(笑い)あなたにお似合いよ、お下がりのお下がりが」
浩美「なんですって」
涼子「お下がりのお下がりも、戻りたがってるみたいだし」
浩美「(怒り爆発)このぉ」

涼子の口をつまもうとする浩美。
それを止めるケンたち。

りえ「やめなよ子供みたいな喧嘩」
ケン「どうしてそんな言い方、二人とも好きなんだろ純一君の事」
浩美・涼子「・・・」
咲子「(浩美に) 意地張ってる場合じゃないわ、純一さんを手放しちゃダメよ」
りえ「何いわれたって、拾ったもん勝ちだって」
ケン「だから男をもの呼ばわりするなって」
浩美「・・・」
ケン「夫婦を長いことやっていると、良い時も悪い時もある。でも嬉しい事や哀しい事を一緒に乗り越えてきたんじゃないか」
浩美「・・・」
ケン「出産に立ち会った純一君が涙をぽろぽろこぼしながら、『ありがとう、ありがとう』って言ってくれたって喜んでたじゃないか」
浩美「なんでそれ?」
ケン「それに彼はいいところあるよ、健三さんの見舞いにもよく来てくれた」
浩美「あの人が父さんの?」
咲子「あなたの大切な子供たちには、半分純一さんの血が流れてるのよ」
浩美「・・・」

悔しさに唇をかみしめる涼子。

涼子「あぁバカバカしい!やってられないわ」

帰ろうとする、涼子。
しわくちゃになった、手切れ金の封筒を手で伸ばす、浩美。

浩美「これ、もって帰って」
涼子「(じっと見つめ)わかりました」

祭壇の前で手を合わせ封筒を祭壇に置く涼子。

一同「!?」
涼子「これ、私からの香典」
ゆう「(明るく)よくお参りしてくださいました」
ケン「手切れ金がわしの香典・・・ショック」

帰って行く、涼子。

浩美「りえ、塩」
りえ「わかった」

塩を取りに行くりえ。

咲子「一時はどうなる事かと思った…それにしてもよく知ってたわね浩美の出産こと」
浩美「そうよ、どうして知ってるの？」
ケン「あ、いや、健三さんから聞いて」
りえ「はい姉さん」

りえから塩を受け取る浩美。

あいの声「ごめんください」
一同「！？」
浩美「まだなんか用なの！？」

お相撲さんの様に山盛りの塩を声のする方へ投げる浩美。

あいの声「(悲鳴)」

ハイカラな格好をしたゆうの実妹あい(六三)がやってくる。

咲子「おばちゃん！？」
あい「(塩を払いながら)こういうお出迎えが流行ってるの、最近の日本じゃ」
浩美「ごめんなさい、おばちゃん」
りえ「愛人と間違えちゃったのよ」
あい「愛人？」
りえ「浩美姉さんの旦那のね…」
浩美「何でもないの(りえに)余計なこと言わないの」

浩美の顔をじっと観察するあい。

浩美「…それにしても、早かったわねおばちゃん」
あい「電話もらってすぐにシャルルドゴール空港飛んだから」

お菓子を食べているゆうを見つけるあい。

あい「おぉ、姉さん大変だったわね」

ゆう「…」
咲子「お母さん、あいおばちゃんパリから来てくれたのよ」

ハグして頬を合わせるあい。
頬を払ったりしてちょっと嫌そうなゆう。

咲子「ごめんね…お母さん」
あい「大丈夫、義兄さんから聞いてたから…」

咲子にハグと頬を合わせる愛。

あい「元気、変わりない？」
咲子「(元気なく)ええ」
あい「あら、どうしたの？」
咲子「…」
あい「言いたいことははっきり言わなきゃダメ、お人好しは損するわよ」
咲子「(苦笑)」

りえにハグと頬を合わせるあい。

あい「いくつになったの？」
りえ「二九」
あい「恋はしてる？」
りえ「(首を横に振る)全然」
あい「(りえの瞳を覗く)大丈夫、恋の予感がするわ」
りえ「本当？いつ？」
あい「さぁ、でも二九なんて青い青い…女は四〇代から(浩美に)ねぇ」

浩美にハグと頬を合わせるあい。

あい「ヤダどうしたの、そんなパサパサで」
浩美「(頬に手を当て)えっ乾燥してる？」
あい「潤いがないわ…心の」
浩美「！」
あい「ご主人には潤いがあるみたいだけど」
浩美「…おばちゃん」
あい「男と女はね、どちらかが良くて、どちらかが悪いなんてないの」
浩美「でも」
あい「男は女を求め、女は男を求める…自然の摂理よ」

新太郎の声「あいさん」
あい「いけない忘れてた…悪いけど荷物取ってきてくれない」
りえ「いいよ」
浩美「私も手伝う」
あい「ありがとう」

荷物を取りに行くりえと浩美。
健三に気付くあい。

あい「あら?」
ケン「(少し顔をそむけ)どうも」
あい「あらぁ、あなた…」

バレテしまったのではないかと焦る健三。

咲子「デイサービスのボランティアの方」
ケン「ボランティア?」
咲子「違うんですか?」
ケン「いえいえ、ボランティアですデイサービスの」
あい「もっとよくお顔みせてくださらない」
ケン「…」

諦めてあいの方を向くケン。

あい「まあ…いい男」
咲子・ケン「え?」

ケンに色目なんかを使っているあい。
あいに敵対心を見せるゆう。

あい「姉さん?」
咲子「お母さんったらやきもち妬いてるのかしら」
あい「え?」
咲子「お父さんと勘違いしてるみたいなの」
ケン「どうやらそのようで」
ゆう「いまお茶入れますから、お部屋に戻りましょう」
ケン「ああすまないね」

ゆうの部屋に戻るケンとゆう。

りえと浩美が荷物を運んで来る。

あい「メルシー」
りえ「ねぇ誰あの車の人？」
あい「新太郎さん」
りえ「おばちゃんの彼氏？」
あい「ううんん、来るときお隣の席だったの」
りえ「飛行機の中で知り合ったってこと？」
あい「ええ」
浩美「ロマンスグレイで素敵なオジサマじゃない」
あい「でしょ」
咲子「初対面の人に送ってもらったの？」
あい「ええ」
咲子「お礼言わないと」
りえ「帰っちゃったよもう」
咲子「いいの？おばちゃん」
あい「ええ・・今夜ホテルで会う約束してるから」
咲子「ええ？！」
りえ「流石おばちゃん、やるなぁ」
あい「ねぇそれよりあのボランティアの彼、何処かで会ったような気がするんだけど」
りえ「おばちゃんも？！」
浩美「ウソ、私も」

咲子の携帯電話がなる。
着信の相手を確認して携帯の電源を切ってしまう咲子。

あい「電話いいの？」
咲子「ええ」

なんだか様子がおかしい咲子。
咲子の顔をじっと観察するあい。

咲子「さあお通夜の準備急がなきゃ」
あい「そうね」
咲子「おばちゃんはいいからお通夜まで休んでて」
りえ「そうだよ、時差ボケ大丈夫？」
あい「悪いわね、じゃお言葉に甘えて」

居間を出て行くあい。

あいの荷物を運ぶりえと浩美。
携帯を出してかけ直そうか迷っている咲子の様子を伺うケン。
が、そのまま奥へ行ってしまう咲子。
浮かび上がる使者。

ケン「誰からだろう?まさか、咲子にも愛人…」
使者2「着信履歴調べましょうか?」
使者1「余計なことしてはいけません」
ケン「いつの間に…」

ゆうの部屋に戻るケン。
使者たちもついて部屋に入る。

ケン「ついてくるんですか?」
使者1「いけませんか?」
ケン「いや別に」
使者2「ご心配なくあなた以外は、私たちの事見えやしませんから」

ゆうの部屋に入ってくるケンと使者。

○ゆうの部屋
ゆう「いらっしゃいませ」
使者2「見えるんですか?!私たちのこと」
使者1「まさか、ボケてらっしゃるんですよ」
使者2「間もなく、という方にも見えるんじゃないですか?」
ケン「ちょっと!縁起でもないこと」

使者たちにお茶を入れるゆう。

ゆう「さあどうぞ」
使者2「どうも」
使者1「(信じられない)まさか、偶然偶然」
ゆう「そうだ、りえの体操服のゼッケント取れかかってたの縫っておかなきゃ」

ゆうをじっと観察し、手なんか振ってみる使者1。

ゆう「(無視)」
使者1「(安堵)ほらね」
ゆう「(去り際に)どうぞごゆっくり」

使者２「ありがとうございます」
使者１「見えてる?!そんな・・・」

部屋を出て行くゆう。
りえが居間に戻ってくる。
ケンの話し声が気になるりえ。

ケン「ゆうさんにまで変なこと言わないで下さいよ・・混乱するから」
使者２「わかってます」
使者１「私たちは、ただあなたに有意義なロスタイムを送って欲しいだけです」
ケン「だったらどっか行っててくださいよ・・落ち着かないったらありゃしない」
りえ「誰と話してんの?」

慌てふためくケンと使者。
使者がマイムで指示を送るが、勘違いして踊りだすケン。

りえ「なにそれ?」
ケン「なんでしょう」

フリップなんかを出して助ける使者、必死のケン。

ケン「ああ・・お茶居。デイサービスでやる劇の稽古してたんだ『生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ』ってね」
りえ「そんなのお年寄りが見て楽しいかな」
ケン「・・」

沢山の湯飲みを不思議に思うりえ。

りえ「誰か来てたの?」
ケン「いやいや、誰も来てないよ」

しどろもどろのケン。
不思議に思いつつも座るりえ。

りえ「あんた、名前なんて言うの?」
ケン「健三です」

バツマークを出す使者。

りえ「健三!お父さんと一緒だ」
ケン「(しまった)いえ、違います、け、け、けん、けん、けん…」
りえ「ケンケン?可愛い」
ケン「ケンです」
りえ「で、ケンケンは幾つ?」
ケン「八二」

再びバツマークを出す使者。

りえ「八二!?」
ケン「(あわてて) いやいや二九、二九です」
りえ「二九?私と一緒だ」
りえ「普段どんなことしてるの?」
ケン「どんなこと?」
りえ「ボランティアとは別に何かしてるでしょ普通」
ケン「(考える)…盆栽」

貧血を起こす使者1。

りえ「盆栽?!」
ケン「(しまった)は、全く分かりませんので…えーっと、えーっと、え、映画です」
りえ「映画の仕事、凄いじゃん」
ケン「いやただの趣味で」
りえ「どんなの好き?」
ケン「(困ってしまう)」
りえ「最近どんなの観た?」
ケン「…」
りえ「じゃあ好きな女優さんは?」
ケン「山本富士子」
りえ「だれそれ?」
ケン「誰って、一九五〇年初代ミスユニバースの…」
りえ「結構、マニアックなんだ」

使者が、マニュアルを見るよう指示する。
マニュアルを盗み見ようとするケン。

ケン「(汗を拭く) 済みませんが冷たいお水をいただけませんか」
りえ「いいけど」

不思議そうにゆうの部屋を出て行くりえ。

使者1「しっかり読んでおくように言っておいたはずですよ」
ケン「済みません」

慌ててマニュアルを読むケン。
パンフレットを手にした咲子と浩美が廊下を通り過ぎる。

咲子「老人ホームの入所案内！」
浩美「いざという時の為にもらっといたのよ。ちょうどおばちゃんも来てるし具体的に話進めないと」
咲子「でも･･･」
浩美「費用はここを処分すればなんとかなるし」
咲子「お母さん納得するかしら」
浩美「納得も何も、誰がめんどう見るの？あんなにボケちゃってるし」
咲子「･･･」
ケン「ゆうが老人ホーム･･･」

二人話ながら奥へ入っていく。
りえが水を持って戻ってくる。

りえ「はい」
ケン「(飲み干して)甘露甘露」
りえ「じじ臭っ、本当に二九歳なの？」
ケン「何言ってんだよ、ベイビー」
りえ「ベイビー？」
使者1「？」
ケン「おいらのホントの趣味は、デスコで踊り明かすことなんだぜぃ」
りえ「デスコ？」
ケン「そうさベイビー」
りえ「ケンケンって本当に面白い人だね」
ケン「気安く呼ぶんじゃね」

マニュアルを確認する使者1。

使者1「(オーマイゴット)」
りえ「ねえ、ねえ、もっとほかにも話してよ」
ケン「(かなり苦しい) MeとKeiどっちが好きだ？」
りえ「MeとKei？」

ケン「おれはKeiだ」
りえ「なにそれ？」
ケン「なにか変ですよ」
使者２「そんな事ないです、頑張ってください」
使者１「(マニュアル片手に)これ一九八〇年のマニュアル！」
使者２「え？！」
ケン「一九八〇年！そんなぁ」
りえ「？」
ケン「どうすればいいんだ？」
りえ「またセリフの稽古？」
使者２「どうしましょう」
使者１「知りません、自分で何とかしなさい」

新しいマニュアルを適当に出す使者２。

使者２「じゃ、これで・・・」
りえ「行くね邪魔しちゃ悪いから・・・」

部屋を出て行こうとするりえ。
そそくさと、消えようとする使者。

ケン「まて、逃げるな！！」

立ち止まる使者２・りえ。

ケン「横に座ってください」
使者２・りえ「でも・・・」
ケン「つべこべ言わず座っててください」
使者２・りえ「はい」

ケンを挟んでぴったり座るりえと使者。
新しいマニュアルを見せる使者２。

ケン「てゆうか、超ヤバイって感じぃ～」
りえ「まさか女子高生の役？！」
使者１「それ女子高生用マニュアル」
使者２「(マニュアルを指差し）じゃこれ」
ケン「まことに遺憾の意を表します」
りえ「政治家の役？」

使者1「正解！政治家用マニュアル！」
使者2「もうお手上げです」
りえ「ケンケンって本当におかしな人だね」
ケン「…」
咲子の声「りえ、ちょっといいかしら」
りえ「はーい、じゃあ頑張ってね(独り言)一体どんな芝居なんだろう？」

ゆうの部屋を出て行く行くりえ。

ケン「(ため息) ああ、参った…心臓が止まるかと思いましたよ」
使者2「もう止まってます」

暗転。

三場　佐藤家夕方

夕方。
一人せわしなく働いている咲子。
が、ふと物思いにふける。

○居間
咲子「…」

一輪のバラを持ってやってくるあい。
咲子の様子が気になる。

あい「ただいま」
咲子「どうだった久々の日本？」
あい「今の若い子たちみんなモデルさんみたいね…はいお土産」

咲子にバラを渡す愛。

咲子「私に？綺麗」
あい「いただき物だけどね」
咲子「いただき物？」
あい「マルシェのお花屋さんがどうぞって」
咲子「こんな高そうなバラを」
あい「一目惚れされちゃったかも」

咲子「！？」

吹き出し笑いあう二人。

あい「みんなは？」
咲子「りえと浩美は買い物、お母さんはボランティアの人と…」
あい「ごめんね何も手伝わなくて」
咲子「ううんん、せっせと動いてる方が気が紛れていいの…」
あい「気が紛れる？」
咲子「何か飲む？」

飲み物を用意しようとする咲子を止めるあい。

あい「いいのいいの、コレ飲みましょうよ」

上着のポケットから缶コーヒーを二つ出すあい。

あい「いただき物だけど」
咲子「えっそれも？」
あい「罪な女よね私って」

缶コーヒーを飲むあい。

咲子「モテモテだ、あいおばちゃん」
あい「咲子ちゃんだってこんな魅力的なんだから…旦那さん、心配で仕方ないんじゃないの？」
咲子「まさか」
あい「山口のご家族とは上手くいってる？」
咲子「…」
あい「まっ、いろいろあるわよね」
咲子「おばちゃんはどうして結婚しなかったの？」
あい「ああん誤解しないで、結婚というかたちをとらなかっただけよ…一緒に暮らした人は(思い出す)ひと月未満も入れたら思い出せないくらい」
咲子「そんなに？」
あい「一夫一婦制に向いてないのかも」
咲子「かもね」
あい「そりゃ姉さんや義兄さんみたいな夫婦は素敵だし立派よ、でも少数派。世の中の女性いや男性も納得しているのかしら一人のパートナーで」
咲子「さあ」

あい「結婚がローンだったらいいのに」
咲子「ローンって住宅ローンとか」
あい「一〇年、二〇年、三五年みたいに初めから結婚を契約にしとけばいいのよ…あと何年で終わるからって離婚しないで頑張ろうって思えるじゃない」
咲子「ユニークだけど子供が出来たら？」
あい「更新したい夫婦は更新すればいいのよ、子供が成人するまでの二〇年間とか」
咲子「凄い発想」
あい「夫や家族に縛られたり縛ったりするくらいなら、結婚なんてねぇ」
咲子「ねぇおばちゃんは子供いらなかったの？出来なかったの？」
あい「…」
咲子「ごめんプライベートな事聞いて」
あい「ううんん」
咲子「私ったら…本当にごめんなさい」

ちょっと気まずくなってしまう咲子とあい。

あい「妊娠ってフランス語で何ていうか知ってる？」
咲子「さあ」
あい「(フランス語っぽく)シャッセジュッセ(射精・受精)」
咲子「シャッセジュッセ」
あい「(笑いをこらえ)そう」
咲子「？」

考える咲子、可笑しいあい。

咲子「シャセイ、ジュセイ(！)やだおばちゃん！」

笑いあう咲子とあい。

あい「なんでも笑い飛ばしちゃえばいいのよ」
咲子「羨ましいなぁその性格」

ゆうとケンが外からやって来る。

あい「姉さん、何処行ってたの？」
ゆう「健三さんとお散歩」
あい「そうよかったわね」
ゆう「今お茶入れますからね」
ケン「ああ済まないね」

縁側からゆうの部屋に入るケンとゆう。

あい「姉さんと義兄さんは結婚して幸せだったんだろうなぁ」
咲子「多分」
あい「羨ましい・・・あら、さっきと言ってること違うわね」
咲子「うん」
あい「男女間の愛なんて存在しないって思ってたんだけどな」
咲子「男と女に愛はないんですか？」
あい「男と女にあるのは恋でしょ・・・でも姉さん達見てると考えさせられちゃうわ、今更仕方ないけどね私は私」
咲子「おばちゃんの生き方、カッコいいと思うよ」
あい「ありがとう。さてと、何かすることは？」
咲子「今のところ大丈夫」
あい「じゃ、服着替えてこようかしら」
咲子「ええ、そうして」
あい「(去り際に)心の中で熟成させたってなにもいい事ないわよ、悩みなんて」
咲子「・・・」

居間を出て行くあい。
再びせわしなく働く咲子。

○ゆうの部屋

ケン「その手提げ、いつも一緒だね」
ゆう「はい」
ケン「なにが入ってるの？」
ゆう「宝物です」
ケン「宝物か・・・なんだろう？」
ゆう「ふふふっ」

少女のようなゆうの姿に微笑むケン。
咲子の携帯がなる。

○居間
咲子「！」

携帯の相手を確認し出ようか迷う咲子。
なかなか電話に出ない咲子を縁側から伺うケン。

咲子が迷っているうちに電話は切れる。

ケン「いいんですか、電話」
咲子「いいの、姑からだから」
ケン「お姑さん」
咲子「(ため息)」
ケン「お姑さんと、けんかでもしちゃいました?」
咲子「喧嘩できるぐらいぶつかり合えればいいんだけど」
ケン「?」
咲子「(深いため息)」
ケン「子供の事?」
咲子「ヤダ、どうして?」
ケン「済みません、昼間そこで・・・」
咲子「聞かれちゃったのね」
ケン「立ち聞きするつもりはなかったんですけど」
咲子「(寂しげ)」
ケン「咲子・・・さん?」
咲子「お友達の息子さん夫婦に、赤ちゃんが出来たんですって」
ケン「?」
咲子「私、結婚して三年たっても五年たっても子供が出来なくてね、不妊治療受けてたことがあるの」
ケン「・・・」
咲子「姑に有名な病院を薦められて通ったこともあったわ」
ケン「・・・」
咲子「あっちの病院こっちの病院はしごして」
ケン「・・・」
咲子「検査しては体外受精、検査しては体外受精」
ケン「咲子」
咲子「で分かったの、私たち夫婦には子供は出来ないって。それ以来近所の娘さんが妊娠しただの、友達に孫が出来ただの言ってくるのよ」
ケン「そんなことして何になるんだ」
咲子「よっぽど孫が欲しかったんでしょうね」
ケン「・・・」
咲子「ごめんなさいね、今日知り合ったばかりの人にこんな話しちゃって」
ケン「いやワシでよければ」
咲子「ワシ?」
ケン「僕でよければ、話すだけで楽になる事もありますから」
咲子「・・・お父さんやお母さんにも孫の顔見せたかった。お父さん心残りだったろうなぁ」
ケン「そんなことない」

咲子「えっ？」
ケン「（左耳を触る）人にはそれぞれ持って生まれた運命ってものがある。それを一生懸命生きる事が大切なんだ。人を妬んだり羨やんだりすると幸せは逃げてしまう」
咲子「若いのにしっかりしてるのね」
ケン「（左耳を触る）いやぁそれほどでも」
咲子「ねぇ左耳触るのって、癖？」
ケン「え？（左耳を触る）」
咲子「ほら」
ケン「あ」
咲子「お父さんも困ったり照れるとしたのよ」
ケン「そうだったかな」

無理に、左耳を触らないように頑張る、健三。

咲子「あなたの言う通りね」
ケン「咲子は自信を持って自分の人生を歩けばいい」
咲子「って、お父さんがでしょ？」
ケン「（苦笑して左耳を触る）その通りです」
咲子「ホラ、また」
ケン「えっ…ああ」
咲子「あなたお父さんの生まれ変わりみたい」

使者たちが現れる。

使者1「（咳払い）」
使者2「（なぜか泣いている）」
ケン「そんなこと絶対にありません」
咲子「当たり前よ」
使者1「わかってますよね、バレたら」
ケン「もちろんです、（使者2に）なんで泣いてるんですか？」
咲子「え？泣いてませんけど」
ケン「ああ、そうですね」
咲子「？」
使者2「お嬢さん苦労なさって（泣く）」
使者1「しーっ」
咲子「あなたって不思議な人…なんだか懐かしい感じ」
ケン「いやそんな（使者に）忙しかったんじゃないんですか？」
使者1「あなたが忙しくさせてるんでしょ」
咲子「そう忙しかったんだわ」

ケン「え、そうじゃなくて」

奥の部屋に向かおうとする咲子。

咲子「(去り際に)話、聞いてくれてありがとう」

奥の部屋に行く咲子。

使者２「(メソメソしている)」
使者１「よくもまあそうやって泣けることで」
使者２「だって（泣く）」
使者１「人にはそれぞれドラマがあります、そのドラマをハッピーエンドに終わらせるために私たちがいるのです」
使者２「でも」
使者１「いちいちドラマに感動してたら仕事になんないでしょ…×」
使者２「いちいちって言われても」
使者１「雑煮を詰まらせてこちらに来たお婆ちゃんの時だって」
使者２「お婆ちゃんといえば飼い犬のシロ。その後親戚のたらいまわしにあって（泣く）」
使者１「あなたの悲しみの基準は理解しがたいです」
使者２「悲しくないんですか？」
ケン「あのぉ他の人のドラマってどんなのがあるんですか？」
使者２「(思い出して吹き出す)中には笑っちゃうのもありましてね」
使者１「いけません！守秘義務があります」
使者２「済みません」
使者１「あなた基本的なことわかってます？」

廊下に出て来るゆう。

ゆう「健三さん」
ケン「なんだい？」
ゆう「見てください、綺麗な夕焼け」

ゆうの元へ行くケン。

ケン「本当だ」
ゆう「健三さん、幾つになってもこうやって一緒に見ていきましょうね」
ケン「ああ」

健三の手をつなぐゆう。

微笑みあう健三とゆう。

ケン「…見納めか、この夕焼けも」

暗転すると読経が流れる。

四場　お通夜の後

明りが入ると通夜の後、喪服姿の姉妹とあい。
通夜らしからぬ恰好をし手提げかばんを抱えながらお寿司を頬張るゆう。
ほろ酔い加減でくつろいでいる一同。

○居間

浩美「お経長かったわね」
りえ「足、しびれちゃったよ」
咲子「疲れたわね」
りえ「今日は愛人騒ぎもあったし」
浩美「りえ！」
あい「なかなか出来ない経験よ、愛人が乗り込んでくるなんて」
浩美「おばちゃんまでぇ」
あい「モテてない旦那より、モテた方がいいじゃない」
浩美「…」
咲子「で純一さんは？」
浩美「子供たち連れて帰った…明日また来るから」
咲子「そう」

自分の皿にどんどん寿司をのせていくゆう。
ゆうを見る浩美と咲子。

浩美「お行儀にはうるさかったのに」
咲子「昔のお母さんは凛としてた…悲しいね」

寿司を次から次へと口に詰め込むゆう。
祭壇の遺影を見詰める、咲子・浩美。

浩美「今晩、ろうそく絶やしちゃいけないんでしょ？」
咲子「そうよ」
浩美「めんどくさい」
咲子「仕方ないでしょお父さんのためなんだから…二時間おきに交代よ」

浩美「(ため息)」

うとうとし始めるゆう。

咲子「お母さん、布団しくからそろそろ休もうか」
りえ「私も、手伝う」
ゆう「りえ、九時には布団に入らなきゃだめよ」
りえ「はいはい」
ゆう「返事は一回」
りえ「はーい」

ゆうの部屋に布団を敷きに行く咲子とりえ。

ケン「ゆうさん、部屋に行きましょうか?」

寿司桶ごと持って行こうとするゆう。

浩美「母さん、明日もお寿司とってあげるから」

あくまでも寿司を独り占めにしたいゆう。

ケン「はい、お寿司はおしまい」
ゆう「はい、お父さん」

祭壇のろうそくを吹き消して行くゆう。
ビールを飲んでいる浩美とあい。祭壇を見る。

浩美「(やばい)あっ!」
あい「しーっ(内緒)」

慌ててろうそくに火をつける浩美。

浩美「(火をつけ直し、お鈴をチンチンチン)化けて出てこないでね父さん」

老人ホームの入所案内を見つけるあい。

あい「これは?」
浩美「うん、母さんのこれからの事なんだけどね・・・」

○ゆうの部屋
咲子「お母さん、服変えようか」
ゆう「いやだ」

そのままの格好で手提げ袋を抱えて布団に入るゆう。

咲子「しわになっちゃうわよ」
ケン「ゆうさんのお気に入りなんですよ」
咲子「けどそんな格好じゃ寝られないでしょ」

ゆうを覗き込むケン・咲子・りえ。

ゆう(寝息をかいている)
りえ「(びっくり)ウソもう寝てる」
咲子「子供みたいな顔しちゃって」

咲子が手提げ袋を外そうとするが、寝ていても離さないゆう。
その様子が可笑しいケン・りえ・咲子

咲子「(ケンに)今日は本当にお世話になりました。あなたがいて助かったわ」
ケン「いえ」
咲子「週何回行ってるんでしたっけ?デイサービス」
ケン「2回・・・かな?」
りえ「いつもどんな話してるの?」
ケン「あなたたちのこと」
りえ「私たちのこと?どんな」
ケン「子供の頃の思い出話や、今頃どうしてるかなとか・・・これからどんな人生を送るんだろうかとか」
咲子「母の話に付き合って大変だったでしょ」
ケン「いやワシも、僕も楽しかった」
りえ「ワシでいいよ」
ケン「りえさんは、姉さん達と年が離れてるから覚えてないかもしれないが、浩美さんも咲子さんもそりゃ君を可愛がって・・・仲良し姉妹だったって」
りえ「今とは大違いだ」
ケン「大人になると余計なものを背負ってしまうからね・・・世間体や見栄、必要以上のプライドとか」
りえ「子供みたいに何にも疑うことなく真っ直ぐに生きていければいいのに」
咲子「そうね、私もそうしたいけど自信ないし時間もない・・・人生とうに折り返しちゃったし」

ケン「時間なんて関係ないさ…大切なのは自分を信じること。自分の信じた道を迷わず進むこと」
咲子「お父さんに言われてるみたいじゃない」
りえ「うん」
ケン「(左耳を触って) 健三さんの受け売りです」
りえ「本当かな、なんだか怪しい」
ケン「(左耳を触って) 本当だって」
りえ「あっそれ」
ケン「え?」
りえ「左耳」
咲子「あんたも気付いた?」
りえ「うん」
ケン「健三さんと同じ癖だってね」
りえ「ますます怪しいぞ」
ケン「りえさんのことも良く話してたよ」
りえ「どうせ悪口でしょう?」
ケン「?」
りえ「私は父さんに嫌われてたから」
ケン「そんなことないよ」
りえ「そんなことあるの…子供の頃ねお父さんと手をつなごうとして振り払われたの、ショックだったなあの時」
ケン「照れくさかったんだよ、孫によく間違えられてたし」
咲子「そうよ、お父さんそりゃあんたを可愛がっていたんだから」
りえ「全然記憶にない」
咲子「りえが2歳位の時夜中に高熱出したことがあったの。どこの病院も閉まってて、お父さんアンタおぶって町中走り回って『開けろ!うちの娘に何かあったらただじゃすまないぞ』って病院の前で大騒ぎして…お医者さんに診てもらえたのはよかったんだけど、お父さん倒れちゃってアンタと一緒に入院」
ケン「一生の不覚だ」
咲子「大切にされてたんだから」
りえ「そんなことないよ私は父さんに嫌われてた…何をやっても反対され怒られ」
ケン「…」
咲子「お父さん頑固だから素直に優しくもできなかったんじゃない?」
ケン「そうですよ」
りえ「…」
咲子「さて、今のうちに休んどきなさいよ」

居間に戻る咲子。

○居間
あい「姉さんは？」
咲子「ぐっすり」
浩美「おばちゃんに老人ホームの話してたの」
咲子「…」
あい「娘のあなた達が決めたことなら何も言う事ないわ」
咲子「本当にいいのかしら」
あい「順番なのよみんな、自分を責めたりしないの」
咲子「でも」
浩美「ほらまた姉さんだけいい子ぶっちゃって」
咲子「…」
あい「私が言うのもなんだけど、自分のせいで娘たちが犠牲になるなんて耐えられない」
咲子・浩美「…」
あい「いいのよ、あなた達の出した答えは間違ってなんかない」

お互い納得させるように顔を伺う咲子と浩美。

達也の声「ごめんください、あいちゃん？」
浩美「あい、ちゃん？」
あい「あらお迎えだわ」
浩美「新太郎さん？」
あい「いいえ、お花屋の達也君」
浩美「達也君？」
咲子「いつの間にそういうことに？」
あい「お先に失礼、明日また来るから」

そそくさと行ってしまうあい。
ついていく浩美。

咲子「どこ行くの？」
浩美「決まってんじゃない達也君見て来るのよ」
咲子「およしなさいって」

聞く耳持たず行ってしまう浩美。

咲子「もう、仕方のない子ね」

と言いつつ見に行ってしまう咲子。

○ゆうの部屋

りえ「私ね、小学校の頃親が学校に来るの恥ずかしくて仕方なかった…大好きなしゅん君が『おまえんち祖父ちゃんと祖母ちゃんが来てるんだな』って」
ケン「子供は正直だな」
りえ「小学生の頃はさすがに言えなかったけど、中学生になったら事故で死んだ両親の代わりに、祖父母に育てられてるって言ってたの…酷い娘でしょ」
ケン「(苦笑)とっくにこの世に存在してなかったんだ」

ケンがりえを見つめる。

ケン「辛かったんだね、気づかなかった」
りえ「ケンケン?」
ケン「この家に生まれてこなきゃ良かったって思ってる?」
りえ「そう思った時もあったけど…今は違う。この家が、この家での思い出何もかもが懐かしい」
ケン「だったら帰ってくればいいじゃないか」
りえ「自由になりたいってタンカ切って飛び出したのよ…今更どの面して、お父さんだって許してくれないよ」
ケン「それでも帰ってきて欲しかった…健三さん言ってたよ」
りえ「え?」
ケン「りえさんに厳しくしてしまったのは、一日も早く自立してほしかったから。末娘で甘えん坊の君は子供のころからお父さんやお母さんの陰に隠れてばかりいる子だったからって」
りえ「私が?」
ケン「筋金入りの父さんっ子だったよ、信じられないかもしれないけど」
りえ「私がお父さんっ子」
ケン「りえさんが一人前になるまで見届ける事が出来るか心配だった、だから気持ちとは裏腹な態度を取ってしまったって」
りえ「お父さんがそんなことを?(動揺)ウソ、ウソよそんなはずない」
ケン「本当なんだよなぁこれが…思いは言葉にして伝えなきゃダメなんだね」

ちょっと悲しくなってしまうりえ。

りえ「お父さんのどこを見ていたんだろうね私」
ケン「それはおあいこさ」
りえ「今すごく後悔してる、お父さんの死に目に会えなかったこと」
ケン「…」
りえ「やっぱり干し柿には縁がないなぁ」

ケン「干し柿？（はっとして）じゃああの旭屋の干し柿」
りえ「旭屋、知ってるの？」
ケン「干し柿は旭屋が一番」
りえ「ソレお父さんの口癖、旭屋の干し柿大好きだったの…でも間に合わなかった」

涙ぐみ唇をかみしめるりえ。

ケン「りえ」

思わずりえを抱きしめてしまうケン。
はじめは戸惑うりえだがまんざらでもなさそう。

りえ「ケンケン」
ケン「（ハッとして離れる）いや、そういうんじゃなくて」
りえ「…」
ケン「その男としてじゃなく、親として」
りえ「親？」
ケン「健三さんの気持ちになったら」
りえ「お父さんともっとよく話せばよかった」
ケン「大丈夫、君の言葉はちゃんと聞いてるから」
りえ「本当？」
ケン「もちろんさ」
りえ「お父さん」
ケン「なんだい？」
りえ「気使って返事しなくていいの」
ケン「（寂しく微笑み）ああそうだね」

ケンを見つめ肩にうな垂れかかるりえ。

ケン「（ドギマギ）」
りえ「少しだけこうしててもいいかな」
ケン「ああ」

そっとりえの肩に手を回すケン。
突然のホイッスルに驚くケン。

りえ「どうしたの？」
ケン「いや別に」

思いもよらぬところから現れる使者達。
再びホイッスルを吹き、りえから放れろと言わんばかりに手をシッシッと振る。

使者１「それ、イエローカード」
使者２「（また泣いている）いいシーンですね」
ケン「でも」
使者１「いいですか、あなたはこの世に存在しないんですよ」
ケン「もう限界だよ」
使者２「（うなずいて）わかります、わかります」
りえ「えっ？」
使者１「初めに約束したじゃないですか」
使者２「約束は破られるためにあるんです」
使者１「バカなこと言ってないで」
ケン「いいだろ少しくらい」
使者１「離れて、離れて」
りえ「（恥ずかしそうに）で、でも」
ケン「いやだ離さない」
りえ「ケンケンたら…情熱的」
使者１「絶対に、ダメ！！」
ケン「いいだろう、減るもんじゃないんだから」
りえ「そんな言い方イヤよ」
使者１「仕方ないロスタイムは終了です」
ケン「（拝み倒す）そんな事言わないで今夜だけ頼む」
使者１「ダメです」
ケン「思い出にしたいんだ、二人の最後の思い出に」
使者１「…」
りえ「わかった」

おもむろに、上着を脱ぎ始めるりえ。
それに驚く使者とケン。

使者１「（ほら見たことか）あーあ」
使者２「ロスタイム始まって以来、初のラブシーン」
ケン「ダメだダメだ」
使者２「（ムード音楽を歌う）」
ケン「いやいや、そりゃまずい」
りえ「いいよ、私もケンケンの事嫌いじゃないし」
ケン「いや、でも」
使者２「とりあえずチュウでも」

使者1「レッドカード、退場です」
ケン「(両耳を触って) 一体どうしたらいいんだ」

ブラウスのボタンに手をかけるりえ。

ケン「(使者に) なんとかしてくれ」
使者1「(知るもんかと背を向ける)」
りえ「どうしたの?」
ケン「(怒って) 君!君は会ったばかりの男にこんなことをするのか?」
りえ「(失礼な) 誘ってきたのはそっちでしょ」
ケン「いやそれは」

使者2の服を引き助けを求めるケン。

使者2「服引っ張んないで下さい」
ケン「服、服なんか」
りえ「言われなくっても着るわよ」
ケン「イヤそうじゃなくって」
りえ「(呆れて)脱げばいいの?着ればいいの?一体どっち?」
ケン「スミマセン着てください」

慌てて服を着るりえ。

りえ「信じられない」
ケン「ごめん」
りえ「ケンケンはいい人だけど、女心ちっともわかってない」
ケン「本当にごめん」
りえ「謝らないでよ、よけい惨めになるでしょ」
使者1「(やれやれ)最後まで気を抜かないでお願いしますよ」
ケン「…」
使者1「あと一〇時間ですからね」

使者が静かに消える。

ケン「一〇時間」
りえ「え?」
ケン「あと一〇時間でお別れだ…お父さんと」
りえ「うん」
ケン「(思いをめぐらす)」

りえ「ケンケンともお別れなの？」
ケン「うん」
りえ「もう会えないの？」
ケン「どうかな」
りえ「？」

物思いにふけるケン。

りえ「私、やってみたい事いろいろあったの…けど自分に意気地がないから何一つ出来なかった。それをみんなお父さんのせいにしてきた」
ケン「…」
りえ「お父さんが私のこと嫌いで邪魔してるってのも、逃げ道を作っていたんだよね…弱いね私って」
ケン「弱いのはりえさんだけじゃない、健三さんだって君がどんどん離れていくのを喜んでいるくせに寂しがってしまった」
りえ「もうどこにも逃げちゃいけない…いまのままじゃお父さんに顔向けできないよ」
ケン「(ウンウンとうなずく)」

ゆうを見るりえ。

りえ「帰ってきてもいいかな」
ケン「もちろん」
りえ「一緒に暮らしてもいいかな、ここでお母さんと」
ケン「りえ！？」
りえ「今頃遅いけどお父さんが好き、お母さんが好き」
ケン「ありがとう…って言ってるよ、健三さん」
りえ「ケンケンに言われるとそんな気がする」
ケン「(うなずく)」
りえ「姉さん達に話してくるね」

ゆうの枕元に来て囁くりえ。

りえ「ずっと、ずっと一緒だよ」

居間に向かうりえ。
ケンも心配そうに、入り口からそっと覗いている。

○居間
りえ「姉さん、姉さん？！」

奥から浩美と咲子がやって来る。

咲子「どうしたの？」
りえ「聞いてもらいたいことがあるの」
浩美「なによ、改まっちゃって」

正座するりえにつられ咲子と浩美も座る。

りえ「（深呼吸）私ここで母さんと暮らして行こうと思うの」
咲子「え？！」

咲子と浩美、顔を見合わせる。

浩美「そのことなんだけど・・・これ」

パンフレットを見せる。

りえ「老人ホーム？」
浩美「母さんのことお願いしようと思って」
りえ「どういうことよ」
咲子「色々考えたんだけど、それが一番いいんじゃないかって」
浩美「うちはまだ子供小さいし、姉さんはお姑さんの面倒見てる・・それにアンタだって仕事があるじゃない」
咲子「お母さんの病気、今のままならなんとかなるかもしれない。でも先の事考えたら」
浩美「ボケがすすんで寝たきりになったらどうする？下の世話だってしなきゃいけないのよ」
りえ「・・・」
浩美「仕方ないけど、母さんのためにも・・・」
りえ「（さえぎって）いい、私一人でもやるから」
浩美「思いつきで調子いいことばかり言ってるんじゃないわよ。だいたいあれほどこの家嫌ってたのにおかしいじゃない？」
りえ「・・・」
浩美「まさか遺産を独り占めしようってんじゃないでしょうね」
りえ「違うよ」
浩美「じゃあなんで急に？」
りえ「この家が好きなの・・・お母さんも、姉さん達も」
咲子、浩美「・・・」
りえ「お父さんのことも好きなの」

咲子、浩美「…」
りえ「ケンケンと話して、お父さんの本当の気持ちわかったの」
浩美「ケンケンて？」
りえ「あのボランティアの人。あの人とお父さんの話してたら意地張ってた自分が馬鹿で情けなくって」
咲子「お父さんにとってりえは特別だった、やっとわかった？」
りえ「うん、誤解してたお父さんのこと…お父さんに辛い思いさせて、死に目にも会えなくって凄く後悔してる」
浩美「りえ」
りえ「もう同じ過ちはしたくない。同じ思いをお母さんにはさせたくない…だからここで母さんと暮らす」
咲子・浩美「りえ」
りえ「お願いします」
咲子「でも仕事はどうするの？」
浩美「結婚するにしても寝たきりの老人付じゃあねえ」
りえ「…」
浩美「無理じゃないのかなあ一人じゃ？ほんとに出来るのかなあ一人で？」
りえ「…」

決心する浩美と咲子。

浩美「姉さんやるか？」
咲子「浩美」
浩美「無理無理この子一人じゃ無理よ。だから、ね！」
咲子「ええやりましょう…私たちの手で」
浩美「そうこなくっちゃ」
りえ「いいの？老人ホームに入れるのやめてくれるの？」
浩美「当り前じゃない、だって私たちの母さんですもの！」
りえ「姉さん！」

うれしくて、姉たちに抱きつく。

浩美「だってさ、遺産独り占めされたら困るしね」
咲子「もう浩美ったら」

笑いあう姉妹。

咲子「昔みたいに三人で頑張りましょう」
りえ「うん」

浩美「あんたの幼稚園のお迎え大変だったのよ『もう歩けない、おんぶ！』って毎日おんぶして帰ったんだから」
りえ「(泣き笑い)ごめんなさい」
浩美「今度はしっかり働いてもらうからね」
りえ「うん」
浩美「あーあ離婚は当分先送りだ」
咲子「浩美ったら」
りえ「(健三の遺影に)私今度は逃げないから・・・見ててね、お父さん」

りえを囲み遺影を見つめる姉妹。

ケン「何時までもお前たちの事見守ってるよ」

涙をぬそっと拭くケン。
いきなり激泣きの使者2と冷静な使者1が浮かび上がる。

○ゆうの部屋
使者1「明日の確認にまいりました」
ケン「(涙をかくし)はい」
使者2「(激泣き)よかったですね」
ケン「(少し引き気味) ありがとうございます、これよかったら(ハンカチを渡す)」
使者2「これはどうも(思いっきり鼻をかむ)」
ケン「(汚い)ああ」
使者1「(ケンに)すみません(手で、額の汗をぬぐう)」
使者2「(使者1に)あれ、こんなに汗かいちゃって」

鼻をかんだハンカチで、額の汗をぬぐってやる使者2。

使者1「あー、何て事を！！」
使者2「え？」
使者1「(怒り心頭ファイルを開き)×××××・・・」
使者2「今いくつ×言いました？え？」
使者1「では明日お迎えに上がりますので最後まで気を抜かないように」
ケン「はい」
使者2「あのぉ・・・」

使者2を無視して消える使者1。

ケン「行かなくていいんですか？」

使者2「行っても、行かなくても同じことなんです私なんか」
ケン「?」
使者2「落ちこぼれなんです私・・・わかります?」
ケン「ええ、なんとなく」
使者2「やっぱり」
ケン「もう一人の方が、出来すぎなんですよ」
使者2「そうなんですよ、あんな完璧にやられたら私のダメさが強調されてしまいます」
ケン「どこの世界もあるんですね・・・出来がいいとか悪いとか、比べたらきりがないのに」
使者2「私なんてダメダメダメ子さんですよ」
ケン「そんな事ないですよ、良い所が一つもない人なんていませんから」
使者2「え?」
ケン「絶対に居ませんそんな人」
使者2「そうですよね、私にもきっと」
ケン「はい、自信持ってください」
使者2「たとえばどこに自信持てばいいでしょう」
ケン「・・・」
使者2「(ケンの言葉を待つ)」
ケン「(何とか考え出す)えっとー、人情味があって、涙もろいところ」
使者2「それから?」
ケン「それから、結構似合ってますよその格好」
使者2「そうですか?(服を見る)ちょっとサイズが・・・」
ケン「いや、気にすることはない。あなたは、あなたである事に自信を持たなくちゃ」
使者2「自分である事に自信を?」
ケン「娘たちが争う姿を見て、自分の育て方が間違っていたって後悔してたんです。なんであんな自分勝手になってしまったのかってね」
使者2「もめてましたからね」
ケン「でもロスタイムを与えられわかったんです、今でも子供の頃と同じ優しい心を持ち続けていることが」
使者2「ええ、良い娘さんたちですよ」
ケン「はい・・・出来る事なら父として娘たちとお別れがしたかった」
使者2「(不安)」
ケン「大丈夫、バラしませんよ約束ですから」
使者2「(安心)じゃ私もそろそろ行かないと、また言われちゃいますので」
ケン「そうですね」
使者2「また、お色気モードに入らないでくださいね」
ケン「娘にそんな気おきるわけないでしょ」
使者2「ならいいですけど」
ケン「・・・」
使者2「では明日」

去りかける使者。

使者2「これ独り言なんですけど、手紙を書いたらいいな」
ケン「手紙・・・そうか」

消える使者2。
手紙を書き始めるケン。
突然ムクリと起き上がるゆう。

ケン「どうしたトイレかい？」
ゆう「はい」
ケン「(手紙を書く)」

居間へ向かうゆう。

咲子「あれお母さんどうしたの？」
浩美「トイレはあっちよ」

いきなり祭壇のろうそくを吹き消すゆう。
暗転。

姉妹の声「もう母さんったら」

五場　告別式

祭壇の前で、お茶を飲んでいるケンとゆう。

○居間
ケン「ゆう、今日はいい天気だね」
ゆう「はい、健三さん」
ケン「服、着替えたほうがいいんじゃないか？」
ゆう「どうしてですか？」
ケン「お葬式にその服はちょっと」
ゆう「お葬式、誰の？」
ケン「・・・」

葬式饅頭をほおばり始めるゆう。

ケン「(独り言) 子供たちには手紙を書いたが、ゆうにはそれも無理だろうな」
ゆう「(どんどん口に饅頭を詰め込む)」
ケン「ゆう」
ゆう「はい健三さん」
ケン「今までありがとう」
ゆう「(饅頭が入ったまま) はい、どういたしまして」
ケン「・・・」

まるで分かっていないゆう。

ケン「ゆう、その宝物見せてくれないか?」

おもむろに手提げ袋から一枚の写真を取り出すゆう。

ゆう「(写真を差し出す)はい」
ケン「(写真を受け取り) これは・・・懐かしいな、もう五〇年になるか」
ゆう「なに言ってるんです、写真館に行ったばかりじゃないですか」
ケン「・・・」

再び写真をまじまじと見つめるケン。
使者が浮かび上がる 。

使者1「おはようございます」
ケン「おはようございます」
使者2「(内緒話で) 手紙、書けました?」
ケン「(手で、OKマーク)」
使者1「? (なんだか言い出しにくい)」
ケン「もう時間なんですよね」
使者1「ええ、まあ」
使者2「これで皆さんとはお別れですがよろしいでしょうか?」
ケン「思い残すことはありません子供たちのことは・・・ただ」

一心不乱で、饅頭を食べるゆうを不安げに見るケン。

使者1・2「(哀れだ)」
ケン「考えようによっちゃあ、ワシの死を理解出来ない方がゆうにとってはいいのかもしれないな、うんきっとそうだ・・・」
使者2「(メソメソする)」

愛おしくゆうを見つめるケン。
気丈なケンに感情移入してしまう使者1。

ケン「こんなことだったらボケてしまう前にお礼を言っておけばよかった」
使者1「お礼？」
ケン「今までありがとうって・・・こんな頑固おやじに五〇年も尽くしてくれたんですからね」
使者1「いくらでも言うチャンスはあったでしょうに」
ケン「ダメですね男ってやつは」
使者2「(泣く)」
ケン「辛いこともたくさんありましたけど終わりよければ全てよしですよ」
使者1「いい人生だったんですね」
ケン「みんなゆうのおかげです。あとはゆうが残された人生を幸せに過ごしてくれることを願うばかりです」
使者1「素敵なご夫婦だ」
ケン「(胸を張り)ええ」

使者1が、ゆうに向かって手をかざす。

ゆう「(正気に戻り)どなたですかあなた達？」
使者1「さっ、お別れをなさい」
ケン「(分かるのか？)」
使者1「(うなずく)」
使者2「良い所、あるじゃないですか」
使者1「・・・」

ゆうの正面に座るケン。

ゆう「(驚いて) 健三さん！どうして若返ってるの？この人たちは誰？」
ケン「分かるのかい？」
ゆう「ええ」
ケン「ゆう、長い間ありがとう」

持っていた結婚写真をゆうに返す健三。

ゆう「え？」
ケン「もうお別れなんだ」
ゆう「どうして？」

遺影を見る健三、その姿を見るゆう。

ゆう「(遺影を見て) 健三さんあなた」
ケン「あまり時間がないんだ、ワシのいう事をよく聞いておくれ」
ゆう「(うなずく)」
ケン「今までこんな頑固者のワシによくついて来てくれた」
ゆう「…」
ケン「苦労ばかりかけて本当に申し訳なかった」
ゆう「(首を横に振る)」
ケン「お前と出会い結婚してこれまで生きてこれた事、本当に感謝している」
ゆう「健三さん」
ケン「(微笑む)ゆうがワシの嫁さんで、本当によかった」
ゆう「(思わず手を握る)健三さん！！」

硬く硬く手を握り締めあう、ケンとゆう。

使者2「(嗚咽)」
ゆう「(泣く)」
ケン「泣くな…泣いたらダメだ…泣かないでおくれ…お前が泣いたら(堪える)」

無理やり笑顔を作ってみるが、涙があふれるゆう。

ゆう「私もあなたと一緒になれて(あなたと夫婦になれて)本当に幸せでした」
ケン「(ウンウン) 身体に気をつけるんだよ」
ゆう「(頷く)」

静かに手を放すケン。

ゆう「待って行かないで健三さん」
ケン「大丈夫、生まれ変わってもまたゆうのところへ行くよ」
ゆう「私も、たとえ夫婦じゃなくても親子でも兄弟でも友達でも」
ケン「ああ」
ゆう「また会えますよね？」
ケン「いつかきっと！ ホラ、せっかくの美人さんが台無しじゃないか」

ゆうの頬をぬぐってやるケン。

ゆう「健三さんったら」
ケン「(使者に向かって) ありがとうございました」
使者1「(泣き顔を見せまいとする)」

使者2「(泣きながら)本当にいいんですね」
ケン「はい」
ゆう「健三さん」
ケン「ゆう」

ケンと使者が、静かに消える。

ゆう「健三さん・・・ありがとうございました」

泣き崩れるゆう。
りえがやって来る。

りえ「お母さんやっぱその服(かえた方が)」
ゆう「(写真を胸に、泣いている)」
りえ「お母さんどうしたの?」
ゆう「私をおいて逝ってしまった・・・健三さんが、健三さんが死んでしまった」
りえ「お母さん分かるの?」

泣き崩れるゆう。

りえ「姉さん、ちょっと、ちょっと来て」

咲子と浩美がやって来る。

りえ「お母さんが、お母さんが・・・」
咲子「どうしたの?」
浩美「母さん?」
りえ「お母さんが、健三さんが死んでしまったって」
浩美「そう言ったの?」
りえ「(頷く)」
咲子「まさか」
りえ「本当なんだって」
浩美「母さん、母さんってば」

突然立ち上がり何事もなかった様子で、いつものように手提げ袋を抱え自分の部屋に戻ってしまうゆう。

浩美「(ため息)なんだ驚かせないでよ」
りえ「(信じられない様子)本当なんだって」

浩美「はい、はい、分かった、分かった」

祭壇の前にある封筒を見つける浩美。

浩美「なにこれ？（驚いて）私たちの名前が書いてある」

りえ「？」

手紙を裏返して差出人を確認する浩美。

浩美「（さらに驚いて）父さんからだ」

咲子「まさか」

手紙を覗き込むりえ。

りえ「（手紙を見て）本当だ」

手紙の封を破って読み始める浩美。

浩美「咲子・浩美・りえ。今まで本当にありがとう。お前たちのおかげで父さんは本当に幸せな人生を送れたよ。咲子、お前は一番お姉ちゃんなんだから、みんなの事頼むな」

咲子「（泣く）お姉ちゃんだなんて」

浩美「咲子が生まれた朝、助産所の桜が綺麗だった。桜の花の命は短い、けど確実に成長してまた一年後見事な花をつける、そんな姿がなんだか咲子と重なります。子供の事で辛い思いをしているようだが、子は天からの授かり物。他人を気にすることなく、夫婦仲良くやっていければそれは幸せな人生じゃないか。寒い冬に耐え、桜が花咲かせるように、あなたの花が毎年咲くよういつも見守っています」

咲子「（嗚咽する）お父さん」

浩美「浩美（涙でよめなくなる）」

りえが代わる。

りえ「浩美、真ん中でしっかり者のお前には、いろいろ我慢させ寂しい思いをさせてしまったね。気の強い浩美は人から誤解され損をすることも少なくないだろう。でも父さんは知っている本当は心優しい子だって。覚えているかい？浩美が幼稚園の頃、自分は咲子のお古の服ばかり着てたのに、私のよれよれのネクタイを見て『大人になったらイーッパイ買ってあげる』って言ってくれたよね。涙が出るほど嬉しかった。その優しさをほんの少し純一君にも分けてあげたらどうだろう。きっとうまく行く、浩美なら大丈夫」

浩美「お父さん」

大きく深呼吸をひとつするりえ。
自分では読めず咲子に手紙を渡す。

咲子「最後にりえ、たとえ私の死に目に会えなかったとしても後悔はしないでおくれ」
浩美「凄いお見通しね」
咲子「年の離れた末っ子のりえは泣き虫で甘えん坊。どこに行くでも私の後ろに隠れてついてきてたね。そんなりえが可愛くて可愛くて仕方なかった。でもりえが成人するまでワシは生きていられるのだろうか。花嫁姿を見ることができるのだろうか。間違った道に進み始めたときちんと正してやることができるのだろうか、心配で心配でついロうるさくしてしまった。家を出てった時、寂しかった心配だった。お前のためだとあえて知らん顔してしまったが本音はもっと一緒に暮らしたかった、いろんなこと話したかった。りえは私の宝、生き甲斐だった…お前の幸せをいつも願っている」

健三の手紙をかみしめ涙する姉妹。

咲子「追伸…えっ！？」
りえ「なに？」
咲子「干し柿ありがとう？干し柿は旭屋が一番」
りえ「？？？」
浩美「何、これ」
りえ「干し柿って…私が病院に持って行った旭屋の？」
浩美「まさかあの時はもう死んでたのよ父さん」
咲子「そうよね」
りえ「(不思議だ)」
浩美「これ誰が置いたんだろう？昨夜はなかったわよ」
咲子「お母さんが持ってたのかしら？」
りえ「(ハッとして)ケンケン、ケンケンだきっと…そういえば今日まだ見てない」

ゆうの部屋にケンを探しに行くりえ。

○ゆうの部屋
りえ「お母さん、ケンケンは？」
ゆう「…」

一枚の写真を真剣に見ているゆう。

りえ「何見てるの？」
ゆう「…」

ゆうの向かい側から、逆向きに写真を覗き込む。

りえ「わぁこれお母さん？綺麗」

ゆう「うふふ」

ゆうの後ろにまわり正しい向きで写真を見るりえ。

りえ「結婚式の写真ね」

ゆう「（自分の写真に、うっとりしている）」

りえ「えっ、なんで！？」

りえの、顔色が変わる。

りえ「ケンケン・・・」

何も考えられなく、その場に座り込んでしまうりえ。

りえ「（くすりと笑って）」

大きな声で、笑い出す。

りえ「干し柿ありがとうか」

ゆうを居間へつれてくるりえ。

りえ「（祭壇の前で）ありがとう」

浩美「どうしたの？」

りえ「お父さんにお礼が言いいたい気分なの・・・ありがとう、お父さん」

ゆう「お父さん、ありがとう」

浩美「変なの」

りえ「お葬式でさようならって言うより、ありがとうって言った方がお父さん喜びそうじゃない」

咲子「そうかもね・・・お父さんありがとう」

浩美「父さん、ありがとう」

祭壇の健三の写真を見詰める一同。

健三の遺影を中心に、一同がすがすがしい笑顔。

あいの声「ボンジュール」
浩美「あ、おばちゃんだ」

あいがやって来る。

あい「爽やかな朝ね」
浩美「ねぇねぇ今日は誰に送ってもらったの？」
あい「カルロス」
浩美「カルロス！？」
咲子「第三の男ね」
りえ「やるなぁおばちゃん」

りえの顔をじっと見つめるあい。

あい「なにかあったでしょ？」
りえ「…」
あい「いいのいいの何も言わなくて…女は死ぬまで恋しなきゃ」

咲子「(うなずく)さあ準備しましょうか、りえ手伝ってちょうだい」
りえ「はいはい」
ゆう「返事は一回」
りえ「はーい」

ゆうとりえの掛け合いに笑う一同。

あい「姉さん私にもお饅頭ちょうだい」
ゆう「少しだけよ」

お饅頭を食べるあいとゆう、せわしなく働く姉妹。
爽やかな風を感じるりえ。
使者と健三が浮かび上がる。

健三「ああ、やれやれ」
使者1「一時はどうなる事かと思いましたよ」
健三「イヤー、本当に」
使者1「こんなにハラハラしたのは初めてですよ」
健三「ご迷惑おかけしました」
使者2「いいんですよ、気にしないで下さい」
使者1「あなたがそのセリフを言いいますか」

使者２「済みません」
使者１「しっかりしてもらわないと、次からはあなた一人なんですからね」
使者２「(嬉しく)えっじゃあ…」
健三「よかったですね」
使者２「はい」
健三「クールに見えて本当は温かい人なんですね、あなた」
使者１「お世辞はやめてください(でも嬉しそう)」
健三「良かったあなた方が私の担当で本当に良かった」
使者２「(メソメソ)」
健三「また（苦笑）」
使者１「で、どうでしたロスタイムは？」
健三「変な言い方かもしれませんが、人生最良の死を迎えられました」
使者２「人生最良の死？」
健三「こんなに満たされた気持ちで、あの世にいけるなんて」
使者１「(微笑む) それは良かった」
健三「けど、なんだかばれてしまった様で」
使者１「ロスタイム後のことまで、感知いたしておりませんので」
健三「それはどうも」
使者２「じゃ参りましょうか」
健三「はい」

何気に使者と健三のほうを向くりえ。

りえ「さよならケンケン…ありがとう」
健三・使者１・２「！？」

はじめは驚く健三だが、穏やかな表情で静かに使者と消える。

幕